OKA
ようぼくの心と心をつなぐ
News Letter
立教178年（H27）
3月23日発刊

私の葛藤と決意

大谷吉輝さん（芦住分教会教人＝写真中央）

私の家は、祖父の代より続く布教所です。信仰者としての祖父の姿を間近で見ることはありませんでしたが、父や私の周囲の方から話をよく聞かせていただきます。その話から祖父が歩んできたであろう道を想像すると、多くの方に知られ、慕われていた素晴らしい信仰者だったのだろうと感じます。そんな祖父がいてくれたおかげで、父もこの道を歩み、私へと道を繋いでくれています。今は、父の背中を追い、歩みを進めさせていただけていると実感します。

父は、これまで数多くの節を通ってきました。そんな父は昨年末、約40年ぶりに「おやさとふしん青年会ひのきしん隊」へ入隊。「本当なら、私が参加できれば……」との思いもありましたが、父がおぢばで勇んでひのきしんに励む写真をみていると、私の心も勇みました。しかし一方で、「自分は果して、親々の思い、先代の思いに添って歩みを進められているのだろうか」という葛藤（かっとう）を覚えたのです。

私は、「教祖百二十年祭」に向かう年祭活動の旬に、約4年間、本部営繕課で勤めていました。事情、身上から実家に戻ることになりましたが、おかげさまでご守護いただき、現在の仕事に就くことができています。しかし、片道約40キロメートルの通勤で、夜勤を含めた交代制の工場での仕事。それも、おぢばから遠く離れているということもあって、本部勤務当時の思いとは裏腹に、地元での信仰者としての通り方に戸惑いを感じるようになりました。

そんな時、教区・支部での青年会行事に誘われ、足を運ぶように。新たな出会いや、たくさんの方との繋がりができ、戸惑っていた自身の心も明るく陽気に、前向きになっていきました。また、いつしか父の代わりに支部例会へ行くようになり、支部の先生にお育ていただくようになったのです。

そんなある日、私に支部青年会委員長の声を頂き、務めるようになりました。道の御用を務められる喜びに、日々、勇んでいたのですが、仕事と御用の両立。当然ながら、仕事に支障をきたすことはできませんし、かといって青年会の御用を中途半端にもしたくない――。悩ましい日々が続きました。

しかし、教区青年会委員の皆さんに励まされ、たすけていただきながら、さまざまな経験を重ねさせていただいています。私の普段の生活では、決して得ることのできなかったであろう〝宝〟を頂き、これまでの歩みと比べると、確実に喜び勇んだ毎日を過ごしています。

これから先、お与えいただく御用に勤（いそ）しみ、親の思いを胸に、先代の心に少しでも近づかせていただきたい。そんな決意を胸に、目前に迫った教祖百三十年祭を笑顔で迎えさせていただけるように、勇んで歩みを進めさせていただきます。

R178 教務報 4月 卯月

4日 岡心勇隊佐賀地区
5日 おぢば伏せ込み団参（午前中）
7日 岡心勇隊奈良中和地区
9日 岡心勇隊五條橋本（あやの台）
10日 教会おとまり会（岡隊・飛鳥川隊）
11日 鼓笛隊練習日
13日 岡心勇隊八幡地区　婦人会委員会
14日 岡心勇隊奈良中和地区
15日 大教会ひのきしん（道弘）
17～19日 教祖御誕生祭団参
18日 おぢば伏せ込み団参（早朝）
18～19日 教祖御誕生祭・よろこびの大合唱
19日 あらきとうりよう入門塾
婦人会本部第97回総会
支部の集い　学生会新入生歓迎会
21日 大教会ひのきしん（相嘉）
22日 祭典準備ひのきしん　事務局会議
大教会ひのきしん（表野・飛鳥川）
22～23日 婦人会伏せ込みひのきしん
23日 大教会月次祭　役員会議
23～26日 婦人会詰所ひのきしん
24日 直属教会連絡会議
教会活性支援部会　婦人会連絡会
24日 ようぼく育成部会　少年会委員会
大教会ひのきしん（東松浦）
25日 おぢば伏せ込み団参（早朝）
詰所運営委員会　青年会委員会
学生担当委員会
26日 本部月次祭　祭典後お礼づとめ
29日 全教一斉ひのきしんデー
30日 岡心勇隊福岡中央会場
岡心勇隊姪浜会場

◆大教会人事（2月23日付）
・おつとめ奉仕人
貞元　古賀文博
天神免　武藤聡宏
上橋　藤本健二

◆教養掛（4月）
岡道　谷川清彦

◆別席願
（2月16日～3月15日詰所受付分）
敷津　マイケル キャッシュマン
鶴城　村田嘉代子
福門　田中彩恵
界澄　渡辺雄治

◆おさづけの理拝戴願
（2月16日～3月15日詰所受付分）
相嘉　多田羅あき子

◆春季霊祭合祀者（3月5日）
・香蘭分教会三代会長夫人（東松浦）
岩永幸美姉
・北佐賀分教会二代会長夫人（東松浦）
北川ツヤ姉
・ホープ教会初代会長（東松浦）
森直代姉
・伊萬里分教会四代会長（西北）
森川浩吉氏
・明澄分教会四代会長（眞澄）
蛇山貞子姉
・道明弘分教会三代会長（道弘）
森川しず姉

2月月次祭　神殿講話要旨

信仰の元一日

大教会准役員　江里道治

祖父・江里常平は明治36年頃、唐津市郊外の北波多村を中心に布教に出ておられた吉田庄太郎先生（後の東松浦分教会初代会長）と出会った。苦労の道中を通っていた祖父に、「いんねんを切る道を、私と一緒に歩こうやないか」と、熱心ににおいをかけてくださり、明治37年2月19日、祖父夫婦はそろって入信した。

その年7月、男の子が生まれ、庄太郎先生が「喜代市（きよいち）」と名前をつけてくださった。私の父である。父は心臓弁膜症（しんぞうべんまくしょう）という病気で、仕事も出来ずにいた。そんな時、庄太郎先生が「喜代さんを俺にくれ。世間では仕事ができなくても、神様の仕事がある」と声を掛けてくださり、父は教会の住み込み青年をさせていただくことになった。昭和8年10月30日、住之都宣教所が設立に至り、父が宣教所長となった。その後、昭和18年の神殿ふしんを経て、昭和19年11月26日、祖父は60歳で出直した。続いて、昭和26年2月12日、父が49歳で出直した。当時、私は16歳だった。

葬儀の翌日、叔父が私に「お父さんは、道っちゃんに跡をついでほしかった。しかし、それを見ることなく出直した。道のようぼくになるには、上級の会長様、奥様に仕込んでいただかなければならない。それとも、叔父さんと一緒に働くか……」と話した。私はすぐに、「青年づとめに行かせてください」と言った。そして、父が出直した1週間後の2月19日、東松浦の青年として伏せ込ませていただいた。

◆

江里家の入信は、2月19日。教会に住み込むと、東松浦分教会二代会長の吉田政雄先生とつる奥様（後の岡大教会四代会長夫妻）が、「道治さんも2月19日に東松浦の青年に来た。2月19日は自分の入信の日と心に誓って、通らせていただきなさい」と話してくださった。そして、自らしてみせて、言うて聞かせて、させてみて、ほめてくださった。これが、政雄先生ご夫妻の仕込み方である。

そうして迎えた、教祖70年祭の折、政雄先生が「おさづけの理を戴いてきなさい」と、ご自分の羽織、袴を着せてくださった。おさづけの理を拝戴したその日は、雪の降る寒い日だった。しかし、この真っ白な雪景色を見た時、「真っ白な気持ちで、今日からようぼくとして会長様、奥様の仰せのままに通らせていただこう」と誓わせていただいた。

それから一カ月後、政雄先生からおたすけのご命を受けた。その方の自宅を訪ねると、息はしておられたが、眠ったようにしておられる。初めてのおさづけのお取り次ぎに、とにかく無我夢中だった。

夜は、東松浦部内の大博分教会で泊めていただき、朝づとめの後、Yさんのお宅へおさづけを取り次ぎに伺う。先輩から聞かせていただいた断食を実行し、おさづけを取り次いだ後は、公園でてをどり。そしてまた、Yさんの元へおさづけの取り次ぎに行く。「親神様、教祖、会長様」との思いで、おたすけに通った3日間だった。そして、3日目の午後、Yさんの奥さんの呼びかけに、「ううん」とうなり声が聞こえ、目が開いた。涙を流される奥さん。何とも言えず、私も泣いてしまった。

3日間の断食に、走る気力も無い。それでも、「会長様に早く知らせたい」との思いで教会へと向かった。教会に着くと、政雄先生が一緒に参拝してくださり、「ようやった、ようやったな」と声をかけてくださった。そして、炊事のおばさんから「会長様は、『江里さんをおたすけに出したから』と、3日間何も食べずに、お茶だけで過ごされていた」と聞かされ、私は政雄先生の胸に飛び込んで泣いてしまった。

「闇の夜は、声を頼りについてこい。夜が明けたらなるほどという日があるほどに」と聞かせていただく。人生には、「本当にどうすればいいのか」という日がある。お道を通らせていただくお互いには、なおのことである。この言葉を通して、わが事をさておいてでも人さまにたすかっていただくということを、政雄先生、つる奥様から教えていただいた。

◆

現在、私の後を継いで会長をつとめている長男・道孝が生まれたのは、昭和41年。私の母は、「徳の無い教会、徳の無い江里家。道孝に徳を積んでやりたい」と、かわいい孫を抱くことなく、生後一週間目に、東松浦の住込役員として勤めに上がった。

昭和41年、教祖八十年祭の年に、東松浦部内に「東志免」、「武生水」、「筑後川」の3つの教会が新設された。その筑後川分教会の設立奉告祭に先だって、政雄先生より「一週間前から筑後川に行って、お世話取りをさせていただくように」とご命を受けた。そして、泊り込みで皆さんと準備を進め、迎えた奉告祭当日のことである。

朝づとめが終わり、政雄先生、つる奥様が到着される。その時、私に電話がかかってきた。受話器を取ると、妻の声。「道孝が――」と言ったまま泣いている。「高熱が続いている。早く帰ってきてください」と、切羽詰まっていた。

すぐさま、政雄先生に事の由を伝えたところ、「あんたが帰って、道孝ちゃんがたすかるかな。今日は、筑後川の奉告祭。門出の日。教会の皆さんは、今日までお世話どりをしたあんたが頼りだ。しっかり見届けて声をかけ、一緒につとめなさい。そして、お祝いの唄の一つも歌わせてもらってから帰りなさい」と。どうしようか迷っていた私に、親なればこそのお言葉。ただ、「はい」と返事させていただいた。

夜遅く教会へ帰り着くと、神前にずっと前から道孝を抱いて座っていたであろう妻の姿があった。夫婦で「道孝を、神様の御用に差し上げます。私たち夫婦は、会長様、奥様の声を頼りに、お道の御用につとめさせていただきます」と心を定め、おさづけを取り次がせていただいた。

すると、親神様・教祖が待っていてくださった。病院に走ると、教区で顔見知りの医学博士とばったり出会ったのだ。そして、すぐに小児マヒの権威と言われる先生を紹介くださり、診察を受けた。闘病の日が続いたが、私たちの心定めをお受け取りくだされてか、しばらく経つと力の入らなかった手足が動いた。そして、徐々に回復へと進み、見違えるほどのご守護をお見せいただいた。

誠の心が定まった時、親神様・教祖は不思議なまでのご守護をお見せくださる。さまざまな方の声に励まされて、教会の御用に務めてくれている。私はというと、信者さんの丹精、別席へお連れする方への丹精を思うとき、まだまだ誠の心が足りていないと反省する。

ただいまは、「心勇講別席団参」のお打ち出しをいただいている。教祖百三十年祭まで、残りわずか。私が師と仰ぐ、政雄先生とつる奥様。強く、優しく、やわらかく、そして厳しくお育てくださったおかげで、いまの私がある。これからも、大教会長様、奥様、東松浦の会長様、奥様にしっかりと心を添えて通らせていただきたいと思う。そして、これからもお道の御用の一端を、精いっぱい務めさせていただきたい。

祖霊様をしのび、遺徳をたたえ
大教会　春季霊祭を執行

道の先人の遺徳を称え、祖霊様を慰める春の霊祭が3月5日、大教会で執り行われました。当日は、直属教会長をはじめ、各教会のようぼく・信者ら約100人が、遠近を問わず参集。午前10時、祭儀に先立って「よろづよ八首」と12下りのてをどりが5交代で勤められました。

その後、大教会長祭主のもと、祖霊様の御前で祭文を奏上。昨年お出直しなされ、大教会祖霊殿に合祀された祖霊様方を一人ひとり読み上げられ、そのご遺徳を偲び、ご功績にお礼を申し上げました。

3月「おぢば伏せ込み団参」

３月の伏せ込み団参。この日は、あいにくの雨模様となり、まだまだ冬の寒さが残るおぢばでした。それでも、西礼拝場階下でのひのきしんに励む皆さんの心は、勇み心でいっぱいでした。20 人を超える少年会員を含む、１０８人がご参加くださいました。

学生、本部勤務者の皆さん！一緒に実動しましょう♪

教会長夫妻教理研鑽　開催

『教祖伝』　教祖のひながたをたどる

教会活性支援部（安井一夫部長）は2月24日、第５回目となる「教会長夫妻教理研鑽『教祖伝』」を開催。教会長夫妻ら、53人が受講した。

教祖百三十年祭へ向けた歩みを進めるこの旬に、「まずは教会長夫妻が教祖を身近に感じ、おたすけに邁進させていただけるよう。また自らの信仰生活に、教祖のひながたを生かせるように」との思いから始められたこの勉強会。講義では、『天理教教祖伝』をひも解き、理解を深めることを目的としている。

講師は、礒部善太郎・南大門分教会長（東中央大教会布教部長）。今回は、『天理教教祖伝』第８章「親心」を取り上げ、二代真柱様の『第16回教義講習会抄録』を基に、スクリーンに映し出された資料を活用したプレゼンテーション形式で講義が進められた。

冒頭、第８章の重要性と、タイトルが「親心」となっている理由について話を進めた礒部講師は、「この章は『おふでさき』を通じて、教祖の親心を受け取らせていただく重要な章」と説明。『おふでさき』の内容を基に、年代を追って教祖のひながたをたどる第６章、第７章に対して、第８章には「教祖の足跡から、折にふれ、事に応じてお説きくださるご教理を伺いたいという二代真柱様の思いが込められている」と述べ、「二代真柱様の著書と併せて『教祖伝』を読み進めると、その道筋が自ずと見えてくる」と話した。

さらに、二代真柱様が「親心」の章から受け取られた「おふでさきに見られる親心のポイント」を挙げ、「親心を尋ね求めるということは、教祖のひながたをたどること」と強調した礒部講師。最後に、「二代真柱様は、教祖がお教えくださった『おふでさき』を絶対に信頼するという心の養い方を推し進められた。その上で、『おふでさき』を全首一貫して読み進めてほしいと強調されている」と話して、講義を締めくくった。

多くの資料を基に分析を繰り返し、分かりやすく解説を進められる礒部講師による「教理研鑽」。受講した教会長夫妻は、一つひとつの疑問点を消化しながら『教祖伝』を読み進め、思案を深めている。

次回は６月に第９章と第10章を取り上げ、最終回として開催される予定。

資料を基に、『天理教教祖伝』を読み深める「教理研鑽」受講者の表情も真剣そのもの。

各地で高まる布教熱

「岡心勇隊」実録

岡につながる教会長やようぼく・信者が、一手一つに布教活動を展開する「岡心勇隊」。一歩ずつ着実に歩みを進めてきたこの活動は、10年の歳月を経て、いまでは月々の定期的な活動として定着している。そして、教祖百三十年祭へ向けての年祭活動にとっても、揺るぎない活動の柱となっている。月々、それぞれの地域で日を決めて、教友同士が声を掛け合い、共ににをいがけに歩く「岡心勇隊」。今回は、九州で実動する、「佐賀地区」と「福岡中央地区」の活動を紹介する。

地道に、コツコツと
『佐賀市内地区』

佐賀市内を走る、国道264号線。その国道から少し入った場所にある佐賀教務支庁の前で、吉田政彦・東松浦分教会長をはじめ、計7人の教会長が「みかぐらうた」を唱和する。

毎月4日は、「岡心勇隊」佐賀市内地区の実動日。いつもより強く吹く風に乗って響き渡る拍子木の音と、「みかぐらうた」を唱和する声に、道行く人や信号待ちの運転手が振り返る。

大教会が「岡心勇隊」の活動を提唱してから、できるだけ毎月、こつこつと活動を続けてきた佐賀市内地区。会場責任者の吉田百合子さん（東松浦分教会長夫人）と由良野志津さん（肥陽分教会長）が主となり、市内での神名流しと戸別訪問を実施してきた。

この日の午前中は、教務支庁で支部の例会が行われていた。支部例会には岡大教会関係者が多数出席しているため、今回は教務支庁前を会場に実動。「みかぐらうた」の後半下りを唱和し、神名を流した。

由良野さんは「御用にお忙しいの中にもかかわらず会長さん方が参加くださり、心勇んで実動させていただけたことがとてもうれしい。一人でも多くの方と共ににをいがけに歩かせていただけるように、これからも地道に活動を続けさせていただきたい」と話した。

教務支庁前での神名流し。拍子木の音が響き渡る。

出会いと勇み心
『福岡中央地区』

「こんにちは、私は天理教の布教師です」「よろしければ、チラシだけでもお読みください」

人の行き来激しい、JR博多駅。「岡心勇隊」福岡中央地区の参加者らは、行き交う一人ひとりに声を掛け、にをいがけチラシを手渡す。

1日に約17万人が利用するという、九州最大規模のJR博多駅。本州と九州を結ぶ主要列車が発着する当駅は、年間を通じて多くの観光客でにぎわう。また、地下鉄は通勤通学に欠かせないもので、多くの市民が利用。そのほか、「博多駅地下街」には、ファッションやグルメなどさまざまな専門店もあり、終日大勢の人でにぎわっている。

「博多駅は多くの人でにぎわうので、とにかくにをいがけチラシを手渡し、天理教を知ってもらおう」との思いから、この日用意したチラシは500部。しかし、「実際には思うように受け取ってもらえなかった」。

しかし、うれしい出来事があった。チラシを受け取った一人の年配の方が、「このチラシ、すごくいいことが書いてある。友達にもぜひ読んでもらいたいから、もう一枚ください」と声を掛けてくれたのだ。聞けば、天理大学の柔道部出身という。

博多駅前での実動。チラシを手に、道行く人に声をかける

「学生時代に天理で生活をしていたが、天理教については深く考えることもなく、こんな素晴らしいものだと気付かなかった。いまから友人に会いに行くから、読んでもらうよ」とその男性。福岡中央地区の会場担当者の一人、森川誠子さん（西北分教会長夫人）は、「積極的ににをいがけをしていると、想像もしていなかった出会いがあるもの。この男性から頂いた勇みは、参加者全員のにをいがけに向かう気持ちを高めるものになった」と話す。

◆

皆さん、「布教活動」と聞いて、一歩引いていませんか？

各地で展開されいる「岡心勇隊」には、たくさんの勇みと喜び、学びや気付き、人との交流があふれています。ぜひ、「岡心勇隊」を活用し、年祭の旬にふさわしい布教活動を展開しましょう。そのためには、皆さん一人ひとりの協力が欠かせません。

今年も開催します！

信仰心育む「おつとめ日」

年祭活動も〝仕上げの年〟。大教会を挙げて開催し、婦人会がその世話取りに当たっている「おつとめ日」が今年も開催されます。

「単なる開催行事にするのではなく、お互いに信仰心を育む内容にしたい」との思いが込められているこの「おつとめ日」。参加者一人ひとりの手によって共におつとめを勤め、年祭へ向かう心を磨きます。

今年の開催予定は、全２０会場（関西７、九州１２、関東１）。ぜひ、こぞってご参加ください。

※詳細については、各会場教会へお問い合わせください。

5月／6月の開催予定

5月10日	相嘉会場
30日	岡道会場
31日	肥城会場
	北佐賀会場
6月 6日	貞元会場
6月14日	大和二見会場
6月28日	東志免会場

きめ細やかな世話取り目指し

教養掛「実技勉強会」

今年1月から、修養科生や講習生のお世話取りをする「教養掛」の体制を一新した大教会。2月25日には、詰所を会場に「実技勉強会」を開催し、教養掛のさらなる意識向上と内容の充実を目指した。

今回の教養掛新体制へ向けては、昨年8月に新たに28人の教養掛を任命し、11月には「教養掛研修会」を開催。練り合いなどを通して意見交換を行い、準備を進めてきた。

教養掛の中には、教会長となって初めて任命された人がいれば、これまでにも勤めてくださっている〝ベテラン〟先生がおられ、経験も知識も人それぞれ。そこで、今回の勉強会では、11月の研修会で実施できなかった「おてふり」や「鳴物」についての勉強を中心に実施した。

この勉強会は、目前に務めを控えている教養掛が主な対象。併せて、自主的に参加を希望する人も含めて、3カ月に一度のペースで実施されている。「おてふり」と「鳴物」をテーマに進められた、今回の勉強会。「おてふり」（写真）では、大教会が数年前からお手直しを受けている、天理教教会本部本部員の宮森与一郎先生の手に合わせることを申し合わせ。そして、教養掛自身が正しく手を振れるよう、また、基本の手を間違いなく伝えられるように、宮森先生のおてふりの映像も準備した。

「鳴物」では、朝夕のおつとめで使用する打ち物を中心に稽古。特に、「すり鉦」のリズムの取り方を、繰り返して練習した。

鳴物の芯は拍子木と言われるが、すり鉦のリズムは「みかぐらうた」を唱和する際のリズムであり、お手をそろえる意味でも重要なもの。その観点から、リズムを正確に刻むことに重点を置いた練習を繰り返し、参加者からは「リズムを合わせることで、すべての鳴物の音色が揃うことを実感した」との声が聞かれた。

今後も、3カ月に一度「勉強会」の開催を予定している教養掛。修養科は、親神様がお鎮まりくださる親里で3カ月間、教理を学び、ひのきしんに励み、人間本来の生き方を学ぶ大切なもの。お互いに支え合って明るく陽気に修養に励み、信仰の喜びを味わい、自らの信仰を見つめ直してもらえるように、きめの細かい世話取りを目指す。

「教祖を身近に さぁ今日もおたすけを」

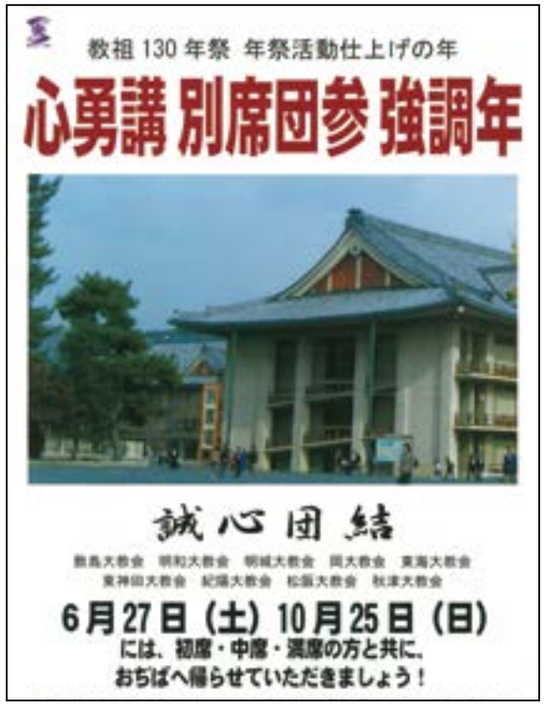
婦人会「伏せ込みひのきしん」

R178年2月22～23日

〝春一番〟が梅の香りを運んでくる中に、楽しくひのきしんさせていただき、お徳をたくさん頂戴したことと思います。みなさん、ありがとうございました。

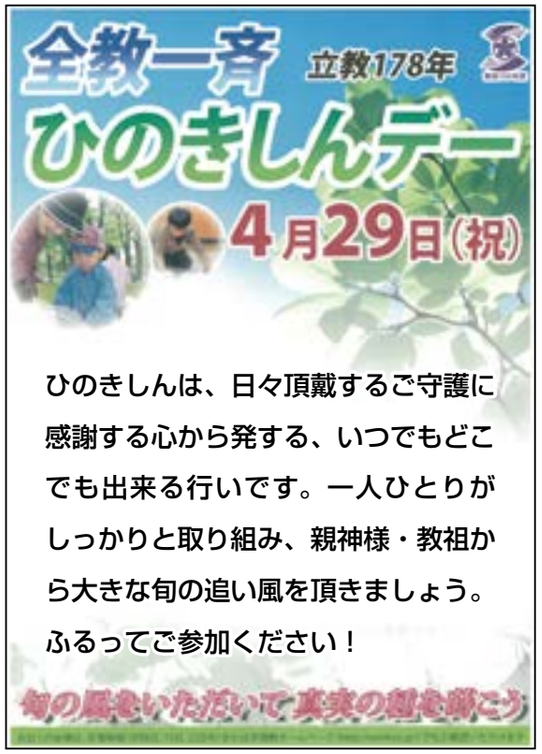
担当係／光武　幸代（須光）

参加者／市丸順子（肥城）、藤本啓子（白石町）、米田知津子（新上）
清水ゆう子（禁院）、古賀喜子（貞元）、小川征彦（西北）
小川二三代（西北）、森川誠子（西北）　順不同



教祖１３０年祭活動〝仕上げの年〟。「心勇講別席団参」に向けて、一手一つに別席者をお連れし、おぢばを精一杯賑やかにしましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

関西ブロック「盛華会大会」開催

婦人会岡支部（吉田陽子支部長）は3月1日、詰所を会場に「盛華会大会（関西ブロック）」を開催。38人（対象者13人、少年会員25人）が参加しました。

若いお母さんたちが集い、信仰を深めた１日

盛華会とは、40歳までの既婚女性の会。新しい家庭を築き、妻として、また母親としても子育てに追われ、悩むことの多い時期でもあるが、「そんな若い世代同士が集い、意見交換を行う中で信仰を深めてほしい」との思いから「大会」を開催。「おぢばへの伏せ込みもさせていただこう」と、大教会の「おぢば伏せ込み団参」に合わせて実施した。

午前中は、少年会員の子供たちとそろってひのきしんに参加。西礼拝場階下の清掃に汗を流し、本部神殿でお礼づとめ。昼食の後、詰所でのプログラムがスタートした。

主なプログラムは、支部長のお話と練り合い。今回の練り合いでは二班に分かれて、「子供」、「お金」、「自由時間」、「親」、「主人」、「徳積み」、「健康」の7つの項目で「価値の順番」をテーマに意見交換。まずは、自らの順番を考え、班で練り合う。

人それぞれの価値観は違い、十人十色。しかし、決して受け身ではなく自らの意見を積極的に伝え、それでいて相手の思いも受け止める。そうして練り合った「順番」を班でまとめ、発表。最後は、お互いの班の結果を通して、「価値の順番」と「価値観を生む人それぞれの環境と心」を学んだ。

さまざまな項目を基に「価値の順位」について意見を発表し、練り合う参加者。

練り合い後の「お話」では、吉田支部長が「一人ひとり、考え方が違えば、価値観もちがう。そのことを理解する努力が大切」と振り返った上で、「そのお互いがたすけ合って、陽気ぐらしへ向かうための目標を見失わないために、どのように歩めばいいのか。また、日々、喜び上手になって暮らせるように、徳積やおつとめをして、信仰を深め合う話し合いを持つことが大切」と話した。

プログラム終了後は、「茶話会」で親睦を深め、お互いの連絡先を交換。再会を誓って、帰路に就いた。

「学生生徒修養会（大学の部）」より
共に学び、信仰を見つめる一週間

吉田あゆみさん
（東松浦分教会）

私は、天理高校に通っていたので、「学生生徒修養会（＝学修）」に参加したことがありませんでした。なので、大学への進学が決まってからは、「学修（大学の部）」に参加することが楽しみで仕方ありませんでした。

私の周りには、「『一れつ会』から扶育を頂いているから、仕方なく参加する」といった友達もいました。しかし、私は参加を申し込む受講票を手にしたときから、ワクワクしていました。「どんな人が参加するのだろう」、「いったい何をするのだろう」と、毎日考えていました。

しかし、いざ「学修」が間近にせまると、緊張と不安からか、急に参加することが嫌になったのです。それでも日は近づき、とうとう「学修」当日。緊張と不安に包まれ、少し憂鬱な気持ちのまま会場まで送ってもらいました。到着すると、周りには知らない学生ばかり。「今すぐ帰りたい！」という思いでいっぱいでした。

そんな私の心を感じ取ってか、受付のスタッフやカウンセラーさんはとても優しく、笑顔で接してくださいました。とても心地いい雰囲気に、自然とこれまでの不安や緊張が解け、前向きな気持ちになっていきました。

私の班は、全員が同じ年の10人の班でした。教会長子弟もいれば、親が全く信仰していないという人も。話し合いの時は、さまざまな立場からの考えを聞くことができ、また、自らの考えを聞いてもらうこともでき、学びが多くてとても勉強になりました。

「学修」で一番大きなプログラムは、にをいがけです。私の班は、大阪市中央区の難波で実動。神名流しや路傍講演、にをいがけチラシ配りなどをさせていただきました。

にをいがけに向けての準備をしていた時のことです。班ごとに路傍講演の原稿を考えていると、同じ班の一人が「にをいがけに行きたくない」と言い出し、原稿も書かずに携帯電話ばかりさわっていました。夜のグループタイムの時に、班員全員で話し合いをすることになったのですが、空気が重く、班長しか口を開きません。

私は、このような話し合いの場で、自分の意見を伝えることが苦手です。でも「このままではいけない」と思い、感じていることをすべて話しました。そうすると、一人、また一人と意見を伝えてくれたのです。そして、「にをいがけに行きたくない」と言っていた友達の気持ちも変わり、共に、にをいがけに参加できるようになったのです。この時、勇気を持って自分の思いを話すことの大切さを感じました。

にをいがけ実動では、道行く多くの人に少し圧倒されましたが、チラシを受け取ってもらえたときのうれしさは忘れることができません。受け取ってもらえないことの方が多く、悲しい気持ちにもなりましたが、受け取ってもらえた時のうれしさは何倍も大きく、思わず涙があふれました。一枚受け取ってもらえると、「もう一枚頑張ろう」と自分の励みになったのです。

「学修」は、ただ楽しいだけではなく、さまざまな学びと経験があり、本当に素晴らしいところだと思います。最初は「行きたくない」と思っていましたが、参加してよかったです。そして、また来年も参加できたらと思います。

ここで学んだことをしっかりと心において、これからの毎日を通らせていただきたいと思います。